

『母親が必要としている支援』を成し遂げるための助産ケア技術
- 産褥早期の授乳場面における助産師と母親との相互行為に関する分析から -

看護学研究科 和智志げみ

I 緒言

産褥早期の母親が必要としている支援として、母親自身が望んでいることと助産師が提供する支援とを一致させること (Mantha, 2008)、母親の思いと助産師の意図がすり合えば効果的な支援につながる (石井, 2008) ことが示されているが、支援の実際は明らかにされていない。そこで、本研究は産褥早期の授乳場面において「母親が必要な支援」を成し遂げるための助産ケア技術の特徴を実証的に明らかにすることを目的とした。

II 方法

前向き観察方法を用いた。研究対象はA診療所またはB助産院で正常分娩し、承諾を得られた初産婦10名と、助産実践能力習熟段階レベルⅢの認証を受けている助産師10名とした。データ収集は、1) 授乳場面における助産師の支援をビデオカメラで撮影しつつ、参加観察を行い、2) 授乳後の後に、助産師にインタビューを行った。分析は、1) で得られたデータについては、エスノメソドロジー的相互行為分析を行った。2) で得られたデータについては、助産師の行為の意図を解釈した。3) 1) と2) で得られた結果を統合し、各事例において助産師は、「母親が必要としている支援」を成し遂げるためにどのように助産ケア技術を提供しているのか、その特徴を取り出した。4) 3) で得られた各事例の分析結果を概観し、産褥早期の授乳場面において「母親が必要としている支援」を成し遂げるための助産ケア技術の特徴を実証的に明らかにした。研究に際しては、本学の研究倫理委員会の承認を得、分析には専門家のスーパーバイズを得ながら行った。

III 結果

10事例から「母親が必要としている支援」が成し遂げられていた15場面を分析し、以下の助産ケア技術の特徴を明らかにした。(1) 支援の目標は、母親自身が自信を持ち、成長できることであると設定する。(2) 母親と新生児の対象像を捉えて、支援の方向性を定める。(3) 母親と関わりながら対象像を変化させ、具体的な支援方法は相互の関わりの中で決める。(4) 母親の身体的な苦痛や思いをその表情や身体動作から察して代弁、身体接触しながら、苦痛や思いを共感する。(5) 沈黙をつくり、低い体勢や距離を取ることで、母親の発言や質問を引き出す。(6) 否定的な表現を用いず、肯定的な表現や婉曲的な表現で授乳手技の評価や助言を伝え、母親との関係性を構築し、母親を傷つけない配慮をする。(7) 授乳方法に関しては、母親の身体感覚に基づいた方法で教示する。(8) 母親の意向に沿った支援を提供する。(9) 支援の評価は、支援の目標に照らして母親と新生児の状態や状況から判断する。

IV 考察

Page (2002) は、「助産師には母親を中心にして個々のニーズを満たすことが求められており、母親の個々のニーズを敏感に捉え、母親と良い人間関係を構築する能力が必要である」と述べている。先行研究では、助産師の能力については、概念レベルの表現にとどまっているが、本研究においては、「助産師の能力は助産ケア技術として描かれる必要がある」との考えのもと、人々の様々な出来事を記述し、何が起きているのかわかりやすいものにすることを目的とした「エスノメソドロジー的相互行為分析」を手法に取り入れることで、当たり前に行われている助産師の母親への支援のプロセスを明示することが可能となったと考える。

V 結論

本研究においては、当たり前に行われている助産師の母親への支援のプロセスを明示することが可能となったと考える。